

3 横浜市総合リハビリテーションセンター難聴幼児通園施設

施設長	佐竹恒夫
定員	30人

就学前の聴覚障害・言語障害がある児童を対象に、親子通園の形態により言語能力の獲得、コミュニケーション関係の拡大などの療育を行いました。今年度も継続して療育内容の充実を図るとともに、言語発達を促進する教材の整備・開発を行いました。また、難聴児の聴力把握と補聴器の最適化を図るため、一定期間経過の後に補聴器適合の再調整を行いました。

今年度は、昨年度から継続した38人の児童に加えて、新たに54人の児童が入園し、57人が退園しました。年間の通園実児童数は92人（昨年度98人）でした。

また、昨年度に引き続き利用児の保護者を対象に、提供するサービスに関する満足度について本事業団小児部門で統一した項目によりアンケート調査を実施しました。

主な事業内容は次のとおりです。

(1) 療育目標

児童の人権を尊重し、一人ひとりの児童が現在及び将来とも、その持てる力を発揮した生活が営めるよう支援することを基本に、療育にあたりました。

療育の目標は、次のとおりです。

- ア 良好な対人コミュニケーション関係の育成
- イ 聴覚の活用と言語・コミュニケーション能力の向上（難聴）
- ウ 言語・認知・コミュニケーション能力の向上（言語発達障害）
- エ 正しい構音（発音）の習得（構音障害）
- オ 社会性の育成
- カ 保護者への支援

(2) 療育内容

難聴、言語発達障害、口蓋裂・構音障害に対する専門的療育を中心に、障害の種類や年齢及び発達段階を考慮した個別療育とグループ療育を実施しました。

ア 個別療育

(ア) 難聴

児童の聴力に合った最適な補聴状態を実現するため、一定期間が経過した後に、補聴器の再調整を実施することに加え、平成19年度に開設した補聴器適合専門指導を継続し、技術革新の著しいデジタル補聴器の最適化に取り組みました。また、早期発見直後の低年齢児への療育を行うことにより、コミュニケーション機能の向上や保護者の家庭における療育方法の習得等について効果をあげました。早期発見により増加傾向にある低年齢難聴児に対しては、家庭内活動、自然への興味、社会観察等、親子での療育活動プログラム作成に取り組みました。

また、新たな聴力検査装置での新生児聴覚スクリーニングにより発見された0歳の難聴児を対象に、極めて早期の難聴療育への取組を行いました。特に、0～1歳の難聴乳幼児を対象に、グループ療育と保護者集団面接の回数を平成20年度から毎週1回（平成16年度から月1回で開始）に増加させ、乳幼児の集団活動と保護者間のピアカウンセリングなどの充実を図りました。

さらに、横浜市立ろう特別支援学校（幼稚部）、横浜市立大学附属市民総合医療センターと連携し、人工内耳装用児の難聴幼児通園施設（個別）とろう学校との並行通園など、インクルージョンに向けて個々の児童に適した療育システムの開発を継続するとともに、ろう学校の「難聴評価スケール」の作成を支援するなど、ろう学校との連携・支援を強化しました。

(イ) 言語発達障害

認知能力の向上や言語記号の使用及び理解能力の促進を通じて、日常生活におけるコミュニケーションの拡大を支援しました。

就学後に問題が明確となるLD（学習障害）のハイリスクがある児童を就学前に医学・発達的に評価し、就学のスタートラインから児童に合った対応を形作れるようにしていくため、発達精神科医師、難聴幼児通園施設の言語聴覚士、臨床心理士、作業療法士、ソーシャルワーカーがLDリスクプロジェクトとしてチームを組み、「学習障害の早期総合評価のための特別プログラム」を継続しました。このプログラムの中では、保護者教室の拡充を図りました。

また、リハセンター、地域療育センターに通う保護者を対象に「LDセミナー」を2回実施し、LDについての啓発活動を行いました。

(ロ) 口蓋裂・構音障害

誤り音の正しい発音学習を通じて、就学年齢までに日常生活での発音の使いこなしを習得させる取組を行いました。

イ グループ療育

難聴児については、自然や社会への関心を広げるため、鉄道の乗車や芋掘り等の園外プログラムで種々の経験を積む機会を設けました。この結果、乗り物等への興味の拡大と語彙の定着などの成果を得ることができました。

ウ 保護者への支援

保護者の療育場面への参加、個別面談、保護者教室、家族教室、家庭訪問、保育所・幼稚園訪問等を通じ、家庭生活と療育に一貫性を持たせ、療育効果が家庭でも発揮できるよう支援しました。特に、新規入園保護者教室を充実させ、保護者支援を拡充しました。

エ 行事

主な行事の実施状況は、次のとおりです。

開催月	内 容
4月	始業式
5月	園外プログラム
7月	園外プログラム
8月	卒園児交流会
10月	園外プログラム
12月	おたのしみ会
3月	卒園式
※この他、誕生会、クラス毎に園外プログラムを実施しました。	

オ 教材プログラムの開発

ことばの表現や理解、認知発達につながる教材、訓練用教材の開発を行いました。

ことばでの表現が困難な児童に、身振りや絵文字、文字等を用いたコミュニケーションの促進プログラム・AAC（補助・代替コミュニケーション）の定着を促進しました。

カ 地域との関わり

港北区内の保育所・幼稚園を対象に、構音障害・LD ハイリスク・聴覚障害の早期発見と治療のためのリーフレットを配布するとともに、「聴覚障害夏季療育セミナー」を実施し、難聴についての啓発を行いました。

また、横浜市と連携して、乳幼児健診において全員に配付するリーフレットに、難聴について啓発するコラムを設定しました。

(3) 利用実績

ア 月別在籍児数

(人)

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
初日在籍児数	52	61	63	64	64	67	66	65	66	70	68	69	※64.6
新規入所児数	14	9	4	6	2	4	3	2	3	4	1	2	54
退所児数	0	2	5	2	1	4	3	2	0	3	1	34	57

※は、初日平均在籍児数です。

イ 在籍児の状況

(ア) 入園経路

a センターへの来所経路 (人)

保育所・幼稚園	28
地域療育センター	9
他医療機関	29
区福祉保健センター	15
直接来所	11
他機関	0
合計	92

b 来所から通園までの経路 (人)

外来 (ST個別)	91
外来 (療育グループ)	1
合計	92

(イ) 区別内訳 (人)

鶴見区	2
神奈川区	6
西区	1
港南区	1
保土ヶ谷区	3
旭区	3
金沢区	0
港北区	58
緑区	3
青葉区	5
都筑区	4
戸塚区	1
栄区	2
中区	1
泉区	1
磯子区	1
合計	92

(ウ) 年齢別内訳 (人)

0歳児	2
1歳児	4
2歳児	10
3歳児	3
4歳児	25
5歳児	48
合計	92
平均年齢	4.1歳

(エ) 障害別内訳 (人)

構音障害 (機能性)	51
口蓋裂	0
難聴	34
言語発達障害	7
合計	92

ウ 退園児の進路状況 (人)

小学校（普通学級）	7
正常構音獲得	30
小学校（通級指導教室）	12
小学校（個別支援学級）	2
他地域療育センター	0
ろう学校幼稚部	2
転居	1
その他*	3
合計	57

*その他の3例は、伝音性難聴が手術によって改善しました。